



退屈な 散歩

川崎ゆきお

「桜の花も散りましたなあ」

「まだ残っていますよ」

「葉桜ですなあ」

「はあ」

「私は毎日この通りを歩いていますので、毎日花見でしたよ。まあ、見ているのは花だけじゃありませんがね」

「桜以外にも、いろいろと花が咲いていますよね」

「そうです。家の横とか、道の脇なんかに、珍しい花が咲いていたりしますよ。これは植えた人がいる。誰だか分かります。手入れしているのを見てますから。あの人は、こんな花が好きなのかと、その人柄まで分かったりしますよ」

「植えた花で、その人が分かるのですか」

「分かりません」

「え」

「どういう人なのかは分かりませんが、こういう花を愛でる人なのだと思うだけです。ただ、愛でているかどうかは分かりません。その花が好きなのかも聞いてみないと分からない。いや、聞いても分からないかもしれない。苗か種をもらったので、育てないといけないと思い、世話をしているだけかもしれません しね。また、本来は好きではないかもしれない花を植えていることも」

「それはどういうことですか」

「苦手な花というか、あまり好意を持っていない花。まあ、滅多にそんなことはないですが、食わず嫌いのようなものでしょうか。または御縁がなかった花、そういうのを敢えて買ってきて植えているのかもしれませんがね。だから、事情を聞かないと分からない」

「そうですねえ」

「自分が好きでなくても、誰かが好きだった花なのかもしれませんしね」

「いや、そこまで観察していませんでした。それ以前に、何となく家の縁に花が咲いているなあ、程度です」

「それでいいのですよ」

「しかし、散歩の楽しみって、いろいろあるんですねえ。そういうことを想像しながらとか」

「まあ、花は動かないので、目に留めることは少ないですよ。他に見るものがないとき、見ている程度です」

「じゃ、散歩中、主に何を見ているのですか」

「やはり、人です」

「はい」

「ゾンビ歩きの人があります」

「ゾンビですか」

「走らないゾンビですよ。古典のゾンビです。ゆっくりと歩いておられる。何処がお悪いのかは分からない。しかし、非常にゆっくりだ」

「走るゾンビもいるのですか」

「最近はね。非常にスピーディーなゾンビで、あんなのに見つかれば、走って逃げても駄目だ」

「怖いですねえ」

「当然、フィクションですよ。そんなゾンビが町中うろうろしているわけがない」

「そうですか。ゾンビって、いないのですね」

「物語の世界にいます」

「はい」

「小学校の前を通ると、子供達の声が聞こえてくる。低学年でしょうかねえ。体操の時間で、運動場に出ている。何をしているのかと見てみると、縄跳びをしている。二人で紐を持ち、次々と他の子供が中に入り、飛んでいる。男の子もね。あれは女の子の遊びだと思っていたんだが、違うんだなあ。まあ、町内で縄跳び 遊びなどしている子供達の光景も見ないですがね」

「でも、授業でやっているのですね」

「これは何かと思うことがありますなあ。しばらくはそれを考える。または思う。そういえば子供の頃、女の子がやっている縄跳びに参加するのが恥ずかしかった。というよりそれはタブーだった。しかし、私は小さかったので参加出来た。小さすぎるといいんでしょうなあ。大きいと駄目だ」

「はい」

「葉桜もそうだし、通りの花もそうだし、ゾンビ歩きの人もそうですが、それらを見ながら、いろいろと思いめぐらす。これが私の場合の散歩の楽しみなのです」

「それはいいですねえ」

「ただし」

「はい」

「気分のいいときだけだ」

「そうなんですか」

「ゆるりとそんなものを見てられる余裕があるときだ。これが出来るのは平穏なときだけなんじやよ」

「今日は、どうですか」

「今日は、いろいろと気に病むことがあったが、まあ、仕方がないと思い、それらを見ていたよ。やはり、単純にそういうものだけを見ていたいものだねえ」

「平穏なときは見られるのでしょ」

「ああ、しかし、退屈だよ。見ていてもね」

「はあ」

「しかし」

「はい」

「そういう退屈なものをもっと見ていたい」

